もぶおん！

壱岐 鹿目

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
もぶおん！

【Ｎコード】
Ｎ６０７０Ｚ

【作者名】
壱岐　鹿目

【あらすじ】
桜ヶ丘女子高等学校に入学した瀧エリとその幼なじみの佐藤アカネ。彼女達は『けいおん！』という物語の中のモブと呼ばれる存在でしかなかった。
しかし立花姫子、若王子いちご達との出会いを得て彼女達にも音楽の物語が生まれる。

けいおん！アナザーストーリーもぶおん！

みんなから見れば私達はモブかもしれないけど、確かに私達の物語は存在したんだ！

#1―入学式―（前書き）

最初はバレー部と髪型の話。
徐々に軽音部と交流を深めて、主人公瀧エリがバンドをやりたいと言い出す予定です。

それまで生暖かい目で見守ってください。

#1―入学式―

窓の外から鳥の泣き声が聞こえる。どうやら朝のようだ。
4月の前半だからまだ寒いし布団から出たくない、そう思った矢先にセットしていた目覚まし時計が7時を示した途端大きな音を鳴らした。

「寒い、眠い…無理」

そう言いながら私は布団から手を出して目覚まし時計をオフにする。すると音が鳴り止み私は再び夢の世界へ……あれ
確か今日は4月8日。私の―――

「入学式だぁぁぁ!!」

私は布団から飛び出せば着ていたパジャマを脱ぎ捨てパリパリの新品の制服を着れば下の階へ鞄を持って急いで下りる。

「あらあらエリ、どうしたの?」

「お母さん、私制服ちゃんと着れてる?変じゃない?」

階段を下りれば私は近くにいたお母さんに体を回転させて制服がち

ゃんと着れているかを確認した。

「制服はちゃんと着れてるから、髪をちゃんとしてきなさい」

「はーい」

返事をしながら洗面所の前に立つ。髪がかなりぼさぼさだった。ストレートトムースで寝癖を直せば、朝食をとろうと食卓に向かおうとしたが途中で足を止める。

「……今日から高校生だし、気分転換に髪型変えようかな」

鏡と向き合いきちんと出来た自分の髪をジッと見る。

「……ポニーテールとか？」

「エリ、入学初日から遅刻するわよー！」

「あ、はーい」

髪型のことは置いといて、とりあえず朝食をとることにした。

◇

私がこれから通う学校は徒歩5分の場所にある駅から電車に乗って15分のところにある私立桜ヶ丘女子高等学校という場所だ。

電車から下りれば、私はホームの自動販売機に小銭を入れてボタンを押す。出てきたのは――――

「エリ、またコーラ？リンで骨溶けちゃうよ？」

後ろから声がしたため振り向けば、いつもは私と同じくストレートヘアーだった幼なじみがいた。だが、今日は何故かツインテールだった。

「アカネ、もしかしてイメチェン？」

私の言葉に幼なじみ、佐藤アカネは照れながら自分の髪を触る。

「あ、うん。ほら、高校生になるんだから変わろうかなって……」

「く、先を越されてしまった……」

言いながら私はコーラのペットボトルを鞄になおしてホームを出る。

「エリも考えてたの？」

「うん。最初はポニーテールにしようかと考えたんだけど、普通過ぎてつまんないと思って」

「ふ、普通……」

学校に向かって歩いていればアカネは私の言葉に少し暗い表情を見せた。あれ、私何か言ったっけ。

校門を通ろうとすれば、反対側から何かが高速でこちらに向かってくるのが見えた。

「はぁ、はぁ……あれ間違えた？」

見るからに鈍臭そうな女の子はため息つきながら校内へ入って行く。

「あの子、鈍臭そうだね」

「エリが言うか、エリが」

そんなこんなで私達も校内に入っていく。下駄箱で学校規定のスリッパに履きかえれば、すぐ近くにあったクラス表に目を通す。

「た、た、た……あった！３組だよ、アカネは？」

「エリ3組？ふぅ、これで10年目か…」

そう、何を隠そうと私とアカネは小学校の頃からの幼なじみなのだが1年から今までずっと同じクラスなのだ。

「よし、この調子であと2年アカネと一緒になれば完璧！」

そんなことを言いながら私はアカネと1年3組の教室に入っていく。

◇

「それじゃ早速だけど、クラス委員長決めるよ。誰か立候補しないか？」

入学式を終えた次の日。出席番号順のためかアカネとは席が離れてしまったため話す相手がおらず私は欠伸をしながら顔を俯せていた。ちなみに私の席は左から3列目の前から2番目。アカネは隣の列の後ろの方だったりする。なんでさ行がアカネ合わせて3人しかいないんだろ。

それよりなんかクラス委員長決めてるっぽい。

「はい」

誰かが挙手した。眼鏡の子が委員長に立候補したらしい。ああいう子は頭良いんだろうなとか思っているうちに昼になる。この学校は入学2日目から色々決めたりするので、昼食はこの日からあるのだ。私は鞄からお母さんの手作り弁当とコーラを出せば椅子と一緒にアカネの机まで持っていく。

「アカネ、一緒に食べよ？」

「良いけど、エリまたコーラ？本格的に骨が心配ね……」

そんな話を交えながら昼休みの一時を過ごした。
そして授業が終わり放課後になる。

「アカネ、帰ろ？」

「良いけど……エリは部活入らないの？」

「入りたいけど、私やりたいことといっぱいあるから考え中」

ちなみに髪型も考え中。本当に困ったものだ。この学校は私立なだけあった様々な部活や同好会があるため迷ってしまう。

「まあそのうち決める予定かな」

「そんな感じで中学の頃は大仏研究会に入ったけど、大丈夫なの？」

「大丈夫、おかげで大仏大好きになったから！」

「いや、そういう意味ではなく……」

私のガッツポーズに対してアカネは額に手をつきながらため息をついた。

下駄箱を出るとテニス部がラケットの素振りの練習をしていた。

「テニス、か」

『てあっ、まだまだだね』

脳内で強力なサーブを打って決まっている私が再生される。だが、何か現実味がなかった。

それから2週間が過ぎた。私は入部届けを机の上に置きながら私は唸っていた。未だに入部する部活を決めれていない。

「どうしよ」

「諦めて帰宅部とかは？」

私の前の席に座りながらアカネはそう呟いた。

「高校生だからちゃんとした部活やりたいじゃん！でも、今日はもう遅いから帰ろっか…？」

この問答も実は１４回目だったりする。玄関から出ると今日はバレー部が練習をしていた。

「青春だねー」

「そ、そうだね…」

アカネは苦笑しながら私の後ろをついてくる。すると唐突に横から声がした。

「あ、危ない！」

声の方向から中サイズのボールが勢いよく飛んできた。私は反射的に鞄を投げ捨て、そのボールをレシーブの要領で打ち上げた。

「……あれ？」

「嘘、今の打ち返した…？」

バレー部のメンバーは驚きながらボールを拾って私の方を見る。後ろにいたアカネも手を口元に隠すよう持ってきて驚いていた。

「エリ、バレーやってたっけ？」

「いや、皆無ですが」

それを聞いたバレーが私達の方向けて走ってきた。

「ねえ貴女、もしよかったらバレー部に入らない？初心者みたいだけど、筋は良いみたいだし」

えっと、これって確か———

「アカネ、私スカウトされてるよ！私ってそんなすごいの？」

「さ、さぁ……」

◇

「アカネ、バレーやるよ！バレー！」

完全にやる気モードになった私は放課後学校の体育倉庫から拝借してきたバレーボールを両手で持ちながら幼なじみの元へ向かった。

「結局バレー、ね。それよりエリ、その髪型どうしたの？」

「心機一転！」

ストレートヘアーだった私の髪型は、バレー部にスカウトされた次の日から変わった。いや、私自身が変わろうとしていた。髪を小さく横に結ぶ形のサイドテールに。

「と、いうわけで入部届け出しに行くよ相棒！」

「ちょ、エリ待ってよ！」

アカネは急いで鞄に荷物を入れれば体育館へ走る私を追いかけた。

みんなから見れば私達はモブかもしれないけど、確かに私達の物語は存在したんだ。

#2―試験―（前書き）

一応紹介だけでも。
基本的にモブキャラは検索したら出てくるので、興味があったら調べてください。

1話に登場した鈍臭そうな子は本編の主人公、委員長に立候補した眼鏡の子はその幼なじみということになってます。

今回も本編と並行した話です。
矛盾点として平沢唯が「クラスで一人、追試だそうです」という台詞が存在しますが、生暖かい目でスルーしてください。

#2―試験―

5月23日。私、瀧エリがこの学校、桜ヶ丘女子高等学校に入学してからもう2ヶ月が経とうとしていた。私はバレー部に入部し、それなりに学校生活を満喫していた。

「アカネー、部活行こー」

「……」

こやつは私の幼なじみである佐藤アカネ。でも何故か馬鹿を見るような目で私を見てくる。

「エリ、勉強しなくて良いの？」

「んな毎日毎日勉強しなくても別に大丈夫でしょ？」

「いや、明日からテストだし……」

……テストと言いましたねこの人。

私はすぐさま鞄に入っていた手帳を確認する。そこには24日から

27日までが中間テストと書かれていた。

「……」

「……」

「アカネさん助けてください」

「嫌です」

◇

親友に裏切られた私は家に帰宅するなり机に向かって勉強を始めた。

「いつまでもアカネに頼ってたらダメダメ私も自立しないと！」

と言いながら机の上に置いてあった漫画に目がいく。

「……くすくす」

漫画に読み耽る。

そして机で寝る。

朝を迎える。

◇

テストが終わり土日を挟んだ月曜日に、テストは返ってきた。

「次、瀧」

「は、はい……」

今返ってきているのは数学なのだが、もう残念過ぎる点数で見たくありません。

「うぅ、アカネぇ……」

「うわ、完全に赤点ね…」

１９点。

そんな点数どうやったら取れるとか聞かれることがあるけど、実際取ったんだから仕方ないだろ。

さて、アカネの点数は――――

「９６点……？」

「あ、うん」

「電卓になってしまえ！」

そんなことを言いながら私は問題用紙をアカネに投げつけた。

「ああ、今回４０点未満だった奴は追試があるから覚悟しておけ」

「んな！？」

「なんですと！？」

数学の先生こと、担任の先生の言葉に私は親指、人差し指、小指を立てた状態で驚くという謎のポーズをとってしまう。

というか校門にいた鈍臭い女子って同じクラスだったんだ。驚く彼女を見て純粋にそう思った。

◇

「アカネさん、追試の人は部活に行けません！」

「じゃあ勉強しなさい」

「わかりません」

アカネはいつも以上に呆れた表情になりながらため息をつく。

「ったく、じゃあ図書室に行くわよ。あそこならエリもちゃんと勉強出来るし」

私の家やアカネの家だと集中して勉強出来ないような口ぶりだね。まあ漫画とか読んだりするから実際そうなんだけど。図書室は私達の教室から歩いて2分程度の場所にある。中に入れば私立なだけあってなかなか広かった。学校案内の時に一度入っただけなので、ちゃんと図書室を見るのは初めてになる。

「じゃあまず数学から……ちょっと待ってね？」

アカネは鞄を置けば近くの本棚から一冊の本を取ってすぐ側にいた女の子に渡した。

「あの、ありがとう」

「ううん、1年生同士助け合わないとね？」

「アカネー、その子誰？」

私も鞄を置けばアカネを追いかけるように本棚の近くへ行く。そこにいたのは私やアカネより遥かに小さい（１５０ｃｍいってるかいってないくらいの）鬼太郎みたいな髪型の女の子が本を持っていた。

「えっと、知らない子だけど…」

「あの、木下しずかです。よろしく」

鬼太郎ちゃんこと木下しずかさんは丁寧に頭を下げた。

「私瀧エリ、３組ね」

「同じく３組の佐藤アカネ。よろしく」

私達の自己紹介に木下さんは笑顔を見せながら返事をして頷いた。

「じゃあアカネ先生、よろしく」

「はいはい」

「あの…」

椅子に座ろうとした時、木下さんはポツリと呟いた。

「なんで勉強……？」

「この馬鹿が赤点とって追試になっちゃてね……」

「んな、馬鹿言うな馬鹿！」

「追試…ですか。私でよかったらお手伝いしますよ？」

木下さんは首を傾げてそう言った。

「ほ、本当？じゃあ是非お願いします！あ、私のことはエリで良いからね。私もしずかって呼ぶから！」

私は立ち上がればしずかの手をギュッと握りしめた。アカネにずっと教わってたら頭痛くなりそうだし、友達増えるし一石二鳥だな。よし、これで追試も合格すれば完璧。

「私だけじゃちょっと無理があるから助かるわ。私もアカネで良いからね…？」

「あ、うんわかった。じゃあエリ、早速やろっか？」

「手抜かないからね」

あれ、交代で教えてくれるんじゃなかったの。まさかの同時に教えてくれるパターンですか。私の頭パンクするって。

◇

次の日、追試だった。この学校の追試はその場で採点する仕組みになっているので、当日に合格か分かる。私は答案を持ってアカネとしずかの待つ図書室へ向かった。

「アカネ、しずか……君達のおかげで合格しました」

「ふぅ、一先ず安心ね」

「エリ、本当によかったよ…」

ホントウニヨカッタ。
ウン、ホントウニヨカッタ。

「ただ私の頭がパンクするまで教える必要はありま、せん……」

私はそう言いながら図書室の床に倒れた。そして一度目の人生を終えた（嘘）。

#3―喧嘩―（前書き）

まだ音楽と関わりません。
今回は音楽の話に入る前の大事なお話です。

2年になったらキャラ紹介しようかな。

#3―喧嘩―

数日前から夏休みに入っており、私瀧エリはそれなりに高校生活をエンジョイしていた。今年からバレーを始め、バレー部に入部したので今日はバレー部の合宿に山に来ております。合宿は４日間で、３日間はびっちり練習して最終日は帰るだけという実に無茶苦茶なものである。ただ私立というだけあって、部屋は二人一部屋というちょっと嬉しいこともあった。もちろん相部屋は幼なじみ兼親友の佐藤アカネだ。

本日は３日目の夜だった。
練習が終わり、各々部屋に戻ってシャワー浴びるなり休むなりするという時間でもある。

「ふぅ、さっぱりした」

シャワーを浴び終えた私はシャワールームから出るなりベッドに寝転ぶ。

「アカネー、明日やっと帰れるよ。家の枕が恋しいよ……」

一人で呟いて初めて気付いた。アカネがいない。

「……あれ？」

シャワーを浴びる前は部屋にいたはずのアカネがどこにもいなかった。トイレの可能性も考えたが、トイレはシャワールームにある。それならばったり会っていなければおかしい。

「恥ずかしがって外のトイレに行ったかな？」

そう思ってベッドから下りようとした時、部屋の扉が開いた。アカネだった。ジュースを買いに行っていたわけでもなさそうだ。

「何してたの？」

「あの、先生に新人大会のレギュラーにならないかって言われて…」

「……え？」

新人大会って、あの新人大会。

そういうのって中学の頃からやってた経験者が選ばれるものじゃないの。アカネは私と同じで大仏研究会に入ってたし。

「その、きっと何かの間違いだよ」

違う。

「私なんかがレギュラーになれたら、エリだってすぐになれるよ――」

「違う！」

「……え？」

「アカネはいつもそうじゃん。私がいつも一緒にやろうって言ったやつはみんなアカネが先に上に行く。小学生の時のソフトボールだって、中学の時の選択のバドミントンだって……このバレーだって！」

「エ……リ？」

「それでいつも私にだって出来る？そういう見下し方が一番ムカつくってなんで気付かないの？」

「私、見下してなんて…」

「自覚なくてもそう聞こえるの！」

違う、そんなことが言いたいんじゃない。

「もう良いよ、アカネと一緒にいたら私が馬鹿みたい。絶交だからね！」

そう叫べば私はそのまま布団に潜り込んでしまった。

違う、違うんだよ。私はアカネにそんなことを言いたいんじゃないのに。

アカネはそのままシャワールームに入っていった。少し時間を置いてから、シャワールームから泣き声が聞こえた。

高校生活、最悪の夜になった。

◇

その後アカネとは一言も会話することなく帰宅した。これはその日の夜の出来事だ。

「……へくしっ」

昨日シャワー浴びてからちゃんと服着ないで寝たせいか、朝から鼻水がすごい。帰宅してからはくしゃみが出て、寒気もする。完全に風邪をひいたかもしれない。

「もう最悪…」

アカネとは絶交しちゃったし、風邪はひくしもう最悪以外の言葉が見つからなかった。

「私、アカネにいつも嫉妬して……馬鹿みたい」

いつもアカネが先に上に行くのには理由がある。私が誘うのは良いが、私はあまり努力をしようとしない。それに比べてアカネは毎日努力を怠らない。それが原因でアカネと差がついてしまう。つまり、徹頭徹尾私が悪いというわけだ。

「だからって今更謝れないしなー」

自室のベッドの上で転がっていれば携帯が不意に鳴る。表示には“木下しずか”と書かれている。

「……もしもし？」

『あ、エリ？今大丈夫…かな？』

「大丈夫だよ。で、何？」

『その、アカネのことなんだけどね…』

ああ、アカネはしずかに相談して仲介してもらったのか。アカネは私と仲直りしたいと思っているのだろう。私も正直、謝りたい。でも自業自得なのにあんなこと言って、アカネが許してくれるかがとても不安でもある。

『新人大会終わったら部活辞めるって』

「……へ？」

部活を辞めるって、なんで。
もしかして私があんなこと言ったから。
『だから仲直りしてほしいって…』
「…馬鹿。これじゃどっちが馬鹿かわかんないって」
『…エリ？』
私は大きく深呼吸をすれば一度携帯を置いて自分の頬を数度叩く。
そして再び携帯を手にした。

「しずか、わざわざありがとうね？あとは私が自分でなんとかするから、本当にありがとう！今度なんか奢るよ」
そう言って電話を切れば、タンスから服を出して着替える。
「お母さん、ちょっとアカネの家行ってくる。すぐ帰るからね！」
私は急いで靴を履いて家を後にした。私とアカネの家はとても近く、3軒隣の家の前なのだ。私は急いでインターホンを鳴らす。
『あ、エリちゃん？今アカネ出掛けててね…』
インターホンのカメラで私と判断したアカネのお母さんはそう言った。
「どこに行くとか言ってました？」

『いや……ただちょっと暗い顔してたね』

「ありがとうございます！」

私はそれを聞くなりある場所へと一直線に向かった。いつもアカネは私の喧嘩した時ある場所で泣いている。そこはこの街で一番星を見渡せる場所なので星ヶ丘広場と呼ばれている。数年前にアカネに聞いたことがある。

『ねぇ、アカネちゃんはなんでいつも喧嘩したらここに来るの？』

『だってここなら流れ星がすぐ見えるもん。だからエリちゃんと仲直り出来ますようにって願おうと思って』

初めて喧嘩した幼稚園の時、私がおもちゃを壊して喧嘩した時、アカネが私の大仏模型を落として壊した時、変わらずアカネはあそこで涙を流しながら星を眺めていた。

「アカネ！」

「……エ、リ？」

アカネは私の声を聞いて振り返る。その瞳には大粒の涙が溜まっていた。私は乱れた呼吸を調えながら、アカネに近付いた。

「合宿の時は本当にごめんなさい！」

「……ふぇ？」

「だから、嫉妬みたいな醜い気持ちでアカネにあんな酷いこと言ったのごめんなさい！アカネが人一倍努力してるのを誰よりも理解しながら、レギュラー決まったことを祝ってやれなくて本当にごめん。この世界で一番アカネのこと分かってたつもりなのに、こんな……」

「……じゃあエリ、一つだけお願い聞いて。そしたら許してあげる」

私が頭を上げればアカネが隣に座るよう促す。

「胸、貸して」

それも喧嘩した時にいつもアカネが頼むことだった。私と喧嘩したことが辛くて、悲しい。だけど人の胸で泣ける相手なんて私しかいない。だからアカネはいつも仲直りした後、私の胸で泣く。幼なじみの泣き声が街に響く。

「アカネ、ごめん」

「良いのぉ、もう良いから…」

アカネと仲直りした日にはいつも、茜色の夕焼けが輝いていた。

＃４―軽音部―（前書き）

話短めですが、ようやく音楽と関わります。

本当に短いです

#4―軽音部―

今日は桜ヶ丘女子高等学校の文化祭。私達1年3組の出し物は教室内の食品バザー。私とアカネが担当するのは焼きそば。

「へいらっしゃい。アカネ、焼きそば一丁大盛りで！」

「了解了解。平沢さん、大盛り一つ」

「了解です」

鈍臭いが代名詞の平沢唯さんが焼きそばを作り、アカネが盛り付けをして私が販売をする。平沢さんは部活が原因で喉を枯らしているらしく、ハスキーボイスだ。

「あの」

「あいよー？」

「ここに平沢さんいませんか？」

受付に現れたのは長い黒髪にお姫様カットのかわいい女の子だ。

「平沢…さん？」

「あ、澪ちゃーん」

振り返れば平沢さんはアカネに焼きそばを任せて受付に顔を出した。

「本番あるし、練習しとかないか？」

「ごめんね、私当番だから…」

それを聞いた美少女はとぼとぼと教室を出て行った。

「…平沢さん何かあるの？」

「軽音部のライブをやるのです」

アカネと交代して焼きそばのキャベツや人参を炒めながら平沢さんはそう言った。

軽音部のライブ、か。マネージャーか何かかな。そんなことを思っていれば気がつけば昼になっていた。途中で委員長の真鍋さんに言われて平沢さんは退室。昼まで私達だけだったが、昼になり私達も交代でようやく解放された。

「ふぅ、疲れた」

「エリは立ってただけじゃない」

アカネはくすくすと笑いながら私の隣を歩く。私はスカートのポケットから文化祭のパンフレットを取り出す。

「今の時間帯からだとみんな休憩だね、勇姿演技しかやってないよ」

「あれ、勇姿演技の中に軽音部ある」

「平沢さんが出るやつだね」

「よし、講堂に急げアカネー！」

私はアカネを置いてそのまま講堂へ走りだす。もちろん途中で先生に怒られて歩く嵌めになったとかはないんだからね。

◇

「間に合った…」

講堂の扉を開けるとすでに明かりが消されており、楽器を構えた４人がスポットライトに照らしだされていた。

「あれ、ギターの子って平沢さんじゃない？」

前の方の席に座るとアカネが指差す先にはあの平沢唯がいた。平沢さんは私達に気がついたのか、小さく手を振った。

「ワンツースリーフォーワンツー！」

ドラマーが始める合図にスティックを叩けば演奏が始まった。何故かわからないけれどギター、ベース、ドラム、キーボードの音を聞

いていると体が自然にリズムを取る。
歌詞こそはファンタジックで、正直恥ずかしいけれど舞台に立つ４人は本当に楽しそうに演奏し、朝尋ねてきた黒髪の女の子は歌っていた。この胸から沸き上がる気持ちは言葉で表現出来ないくらい、すごい気持ちだった。演奏は２分程で終わった。短い演奏だけど、彼女達は私に何かを与えてくれた。

「エリ、すごい演奏だったね！」

「……アカネ」

私は無意識に呟いた。

「私、バンドやるよ」

◇

家への帰路、私は空をボーっと眺めていた。バンドやるよ、か。あ

の演奏に感動して、私もバンドやりたくなっちゃったんだ。でも、さすがにアカネをここまで巻き込むつもりはない。私はそう誓いながらアカネと別れた後、全小遣いを持って楽器屋へ向かった。

「うわー、色んなギターとか置いてあるんだな」

その店には腐る程のギターが置いてあった。しかも色々な形があるため、どれを選べば良いか全くわからない。

「ともかくお金ないから安いの選ぼ」

「ギターは安いのより、しっかりした高いの選んだ方が良いみたいだよ」

唐突に背後から声がしたため振り返れば、私の親友こと佐藤アカネがいた。制服に鞄を持っているため、どうやらあのまま私を追いかけてきたみたいだ。

「エリの考えてることなんて丸分かりなんだから」

「……でもなんでアカネがここに？」

「あのね、私いつもエリに引っ張られてた。でも、私は私の意思で私もバンドやりたいって純粋に思ったの」

アカネの顔つきはいつもに増して真剣だった。多分本気なんだろう。

「じゃあ私もいつもと違うことするよ」

私。

いつも佐藤アカネと一緒に何かをやって先を越されていた私。

「私、アカネと並ぶ。アカネと並んですごいギターリストになるよ！」

そう言いながら私は5万ちょっとの白いギターを適当に選ぶ。

「よし、お前が私の相棒だ」

「エリがギターなら私はベース」

そう言ってアカネはベースコーナーにあった青いベースを持ってくる。

「よし、会計済ませて早速練習だ！」

「おー！」

私達に音楽を出会わせてくれて、そしてアカネと肩を並べて何かを出来る。軽音部は私達の天使のように感じられた。

#5―冬休み―（前書き）

あれ、音楽と関わり始めたのにな。
全く音楽の話がねェ…

とりあえず仮バンド結成の話です

#5―冬休み―

今日は2学期の終業式。学期の終わりなので明日から冬休みなのです。バレー部も忙しいが、私達にはもっと忙しいものがあった。それはギターとベースの練習だ。私が買ったギターはフェンダー・ストラトキャスターの白。アカネが買ったのは同じ会社のフェンダー・ジャズベースの青。ちなみに両方適当に選んだもの。

「でもさ、二人でバンドは組めないな。あと経験者のギター一人と、ドラムが欲しいな……」

ため息つきながら私は俯く。ギターを始めて1ヶ月ちょっと。少しは上達しているつもりなのだが、それでも薄い音をカバーするためにギターがもう一人欲しい。それとリズムもベースだけだと心許ないのでドラムが欲しい。

「まあそれはそれとして、クリパやろう！」

「それはそれとしてじゃないでしょ！」

実際問題そういうわけにはいかない。バンドをバレーと両立してやると決めた以上、やめることは出来ない。

「でも和みは必要でしょー？」

「じゃあギターかドラム見つけたらやろ」

誰かギターかドラムやってくれそうな人――――いた。
私は鞄を持ってすぐさま図書室へ向かった。アカネもため息をつきながらその後を追う。
図書室はいつものように静かだった。そんな静かな図書室の大きな机のところに図書室で出会った木下しずかがいた。

「しずか、頼みがあるので聞いてくませんかぁぁ！」

「な、何…？」

しずかはどうやら何かの本を読んでいたらしく、本にしおりを挟んで閉じれば本を机に置く。

「お願い、ギターがドラムをやって下さい！」

「い、いや私そんな出来ないし持ってないよ？」

「そこをなんとか！」

私は両手を合わせながらしずかに深々と頭を下げる。その行為にどうすれば良いのかわからないしずかは戸惑っている。
ガンッ。
アカネに殴られた。

「無理強いはダメ」

「いけず…」

私は殴られた頭をさすりながら椅子に座る。アカネも鞄を置けば、冬休みの宿題を出して始める。

「アカネ、もう宿題やるの？」

「何事も早めが肝心。エリなんて冬休み最終日になって宿題写させてとか言うんだから、たまには早めにやったら？」

そう、中学の頃は夏休みも冬休みも宿題を写させてもらっていた。自慢出来ないが今年の夏休みの宿題もだ。

「でもなー」

「あんた達、うるさい」

唐突に投げられた声にびっくりして振り向く。そこにはツインテールのお姫様みたいな女の子がいた。

「ここ図書室、騒ぐな」

そう言って女の子は元の席に戻る。

「えっと、誰？」

「確か2組の若王子さんだよ。名前は忘れちゃったけど…」

「なんかギャップのある子ね…」

若王子。なんか珍しい名前だね、私が言えることじゃないけど。私は勢いよく席を立てば若王子さんの元へ行く。

「すいません若王子さん」

「何？」

「ギターやりませんか？」

「ヤダ」

うわ、この人ＹＡ☆ＤＡとか言ったよ。

「ドラムなら大丈夫だけど」

うわ、この人ドラムなら大丈夫とか言ったよ。

「……は？」

「あんた達バンド組もうとしてるんでしょ？さっき聞こえた、だったらドラムでよかったら入ってやるって言ってるの」

「アカネさんアカネさん、クリパしましょう！」

「趣旨が違うでしょ！えっと、若王子だっけ？」

アカネの元へ叫びながら寄るとグーで頭を殴られた。アカネは私を殴れば若王子さんの横に立つ。

「私達本当に初心者だけど、本当に良いの？」

「構わない。どうせ暇だし」

つまりギターが私、ベースがアカネでドラムが若王子さんってことは――

「クリパができる、じゃなくてバンドが組めるじゃん！」

「ただあんただけじゃ問題だからギターもう一人いるけどね」

そんなことはどうでも良い。いやどうでもよくないけど。でもこれでクリスマスパーティーが出来る。

「で、場所は？」

「もうバンドのことはそっちのけね…」

「クリスマスパーティーなら私も参加する、プレゼント交換したいし」

「……」

図書室は静かにする場所なのだが、もうそんなこと関係なしに大きな声でクリスマスパーティーのことについて考え始める私。

「先言っとくけど私の家は無理だから」

アカネがそう言いながら挙手する。しずかも同じように挙手した。

「わ、私も無理なのだが……」

そう言いながら若王子さんの方をちらりと見る。

「良いけど」

「やったー！」

というわけでバンド結成記念にクリスマスパーティーをやることに決定しました。

◇

「こんにちはー」

若王子さんの両親は昔バンドをやっており、そのため若王子さんはドラムセットを持っており基礎的なことなら出来るらしい。

そしてその両親はクリスマスライブのため若王子さんを置いて出て行ったらしい。

「いちごも大変だね…」

若王子いちご。それが彼女の本名である。私とアカネはいちごの家に上がるなりすぐに火燵に入る。家にはすでにしずかも来ていた。そしてその横にはなんかいかにもギャルですみたいな女の子がいた。

「えっと、どなた？」

「立花姫子、ギター経験者で同じクラスだから誘ってみた」

「初めまして瀧さん、立花です」

「瀧エリです、よろしく…」

立花さんは笑みを浮かべながら私の方を見てくる。

「あなたがギター…なんだよね？」

「あ、うん」

「私、部活あるから土日と祝日しか参加出来ないけど、それでも良い？」

部活やってるとかこの人たくましい。しかも私達のバンドに加わってくれるみたいだし、なんか本当にすごい。

「私は佐藤アカネ、ベースです」

「よろしく、一応ギターは中学の頃からやってるよ」

中学の頃からって、もしかして3年以上やってるってことじゃないの。そんな感じで喋っているといちごが次々と料理を机の上に置く。

「うわ、すご……これいちごが作ったの？」

「しずかも手伝ってくれた…」

しずかの方を見ると、小さく手を振る。食事を終え、ケーキを食べ終えればあらかじめ用意していたプレゼント交換の時間になる。メンバーは5人。それぞれのプレゼントをシャッフルして持ち、音楽が終わるまで回し続けるルールになっている。

「ジングルベール、ジングルベール鈴がーなるー」

プレゼントをとりあえず回しまくってみる。

「ストップ！」

見事に綺麗にシャッフルが出来たみたいだ。私の持つプレゼントはしずかが用意してくれたプレゼント、アカネは立花さんの、しずかはいちごの、いちごはアカネの、立花さんは私のを持っている。

「さ、イッツァオープン！」

箱を開ければ、中には本が入っていた。しかもアカネやいちごが読みそうな難しい本が。

「しずか、なんだよこの本！」

「え、アカネが読みたいって言ってたから買ったんだけどエリが当

てちゃったか…」

そう言いながらしずかも箱を開けた。中にはピンク色の手袋が入っていた。いちごのプレゼントらしい。

「いちごのプレゼント、なんかかわいい…」

「……ヤダ？」

「いや、良いって意味だよ！」

しずかは満面の笑みを浮かべながらいちごにそう返した。そんないちごもプレゼントを開封する。

「……熊のぬいぐるみ」

少し小さめの熊のぬいぐるみが中に入っていた。いちごは嬉しそうに（私達には全然見えないが）熊のぬいぐるみを抱く。

「アカネ、ありがと」

「ううん、いちごに当たってよかったよ」

そう言ってアカネもプレゼントを開封する。ちなみにアカネは立花さんのプレゼントだ。

「……あ、チューナーだ」

「それ、ギターかベースの子にって思って買ったんだ。君でよかっ

たよ」

そう言いながら立花さんは私のプレゼントを開ける。すると中からバネ仕掛けのおもちゃが飛び出した。そう、ビックリ箱だったのだ。

「……えと」

「よし、引っ掛かった！」

私は拳をグッと握りしめた。おかげさまで同時に二方向からげんこつを喰らう嵌めになった。

#6―初ライブ―（前書き）

やっと音楽に関わった…。
ただモブキャラ使って馬鹿みたいなことしてただけだったけど、ようやくです。

メインの話が6話にて初めて…。
あ、けいおん！もそんな感じか…

#6―初ライブ―

今日は4月の7日。
今日から新学期なのです。

「よし、新学期は気合いで行くぞー！」

私、瀧エリは幼なじみ佐藤アカネの横で両手をバンザイしながら学校に向かう。学校に到着すれば玄関にクラス替えの表が乗っていた。その前で軽音部のメンバーが何か話している。

「私は……1組！」

一番最初に見た表のた行に私の名前があった。今日から私は2年1組のようだ。

「ってことはアカネも1組？」

「ううん、2組」

……えっと、私が1組でアカネが2組。そっか、ついにアカネと離れ離れになる時がやってきたようだ。ため息をついているとしずかといちご、姫子が登校してきた。

「おはようエリ、アカネ」

「なんかエリ暗いけど、クラス別になった？」

「姫子のおっしゃる通りです」

顔を上げればしずか達もクラス表を見始める。

「2組」

「お、私も2組だ」

いちごと姫子はそれぞれ自分の名前を見つければそう呟いた。つまり私のは違うクラスでアカネと同じクラスというわけだ。

「しずか！？」

「えと、1組…」

「しずかぁぁ！！」

私は歓喜のあまりにしずかに抱き着いてしまう。ちなみにしずかは身長がかなり低いため、この状態になると押し潰されてしまうのだ。

◇

「いや、それにしてもしずかが一緒でよかった。これでしずかも2組なら私、死んでたかも」

「そんな大袈裟な…」

「それに、私達もいるんだぞ？」

しずかの席の前に立っていた私が振り向けば、そこには軽音部の平沢さん繋がりで知り合った秋山さんと真鍋さんがいた。

「秋山さんと真鍋さんも1組だったんだ」

「瀧さんに木下さんも一緒なら安心ね、澪？」

「本当、一次はどうなるかと…」

秋山さんは安心したようにため息をつく。

「その様子だと他のメンバーは違う組？」

「全員2組だよ」

うわ、アカネといちごと姫子がいるのに残りの軽音部メンバーも2組とかどんだけ恵まれてるんだろ2組。

「まあ一年間よろしくね、澪に和？」

◇

「新歓ライブ、か」

放課後、講堂に顔を出せば軽音部が新入生歓迎のライブをやっていた。文化祭の時とは違いボーカルは唯がやっており、衣装も普通の制服だった。

「私達もライブやりたいよね…」

私、アカネ、いちご、姫子でバンドを結成（しずかはアシスタント）してから約3ヶ月。姫子が中学1年から3年までバンドを組んでいたためギターがかなり上手く、ベースもそれなりに知識があったため私達で作詞作曲したオリジナル曲を練習して、もういつでもライブを出来る状態なのだがステージがないため出来ないのだ。

「さすがにライブハウス借りるわけにもいかないしね」
隣にいた姫子がそう呟く。
「ねぇ、軽音部の部室借りられない……かな？」
「なんで軽音部の部室？」
アカネの提案に私は首を傾げた。
「その、軽音部はそこで練習してるんだからプチライブ出来るかなって…」
確かに軽音部がいつも練習している場所を借りられればプチライブくらいなら出来る。客はいないけど。
「じゃあさ、後で聞きに行こうよ？」
ライブが出来るかもと思えば私はワクワクが止まらなかった。軽音部の新歓ライブが終われば私達はすぐに裏方に回る。
「澪、お疲れ様ー」
「エリ、どうしたんだ？」

澪はベースをケースに直しながら首を傾げる。

「話があるから、片付け手伝いに来ました」

そう言いながら私は幕の閉じた舞台に置いてあるアンプを持ち上げる。アカネやしずか達もアンプ運びを手伝い始める。

「いや、話は聞くけど悪いって…」

「良いから良いから、ほら行こう？」

澪達はドラムのセットやコード、マイクを持って音楽室に向かった。音楽室に楽器やアンプの配置が終わると私は力が抜けるように腰を下ろす。

「疲れたー」

「みんな、お茶どうぞ？」

キーボードの琴吹紬さんはティーカップにいい香りのする紅茶を注ぐ。

「あの、私達話しにきただけだし悪いよ…」

「手伝ってくれたお礼みたいなもんだから、ちょっとくらい飲んでいってよ」

「そーだぜ！さすがに手伝ってもらって話聞くだけじゃな…」

「お菓子もあるよー？」

他のメンバーの誘いもあったので断れず、いつもより若干大きくしたらしい机の席に私達は座ってお茶を頂く。

「で、話って何なんだ？」

澪が話を切り出す。

「私達バンド組んでるんだ。それでここでプチライブをさせて欲しいな、なんて考えてて」

「普段練習で使ってるのは分かるけど、少しだけ貸して欲しくて…」

「え、別に良いけど」

部長の田井中律さんは即答した。

「え？」

「みんな、別に一日くらい良いだろ？」

「まあクラスの仲間だしな」

「私は演奏聞けるなら良いよー」

「私も問題ないです」

他のメンバーも相違ないらしく、使わせてもらえるらしい。正直こんなに簡単に借りれるとは思っていなかった。

「てゆーかやりたかったらいつでも良いなよ。私達もライブ前とかじゃなかったら基本こんな感じだし」

えっと、つまり普段はお茶してるだけと。それなのにあんなすごい演奏をするなんて本当にすごいよね、軽音部って。

「で、いつやるの？」

「一週間後はダメ？」

姫子がカレンダーを見ながらそう言った。

「んー、別に大丈夫」

「じゃあその日の放課後ね。私達このまま練習するから帰るよ」

姫子はそう言いながら立ち上がる。アカネといちごもそれに合わせて立ち上がる。おいしいお菓子とお茶をお預けにして私としずかも音楽室を後にした。

◇

一週間が経った。姫子に猛烈な特訓を受けて私達はかなり上達した気分だ。そして今日はついに私達の初ライブとなる。私は授業が終わると澪と一緒にギターを背負ってすぐさま音楽室に向かう。到着するとティータイムをしていた机や椅子はどかされており、いちごがドラムをセットしていた。

「いちご早いね、姫子とアカネは？」

「二人とも隣の準備室で練習。私も律のドラム借りて準備室で練習するから、一回通しするわよ」

「了解。澪、あと頼むね？」

私は澪に手を軽く振ればそのまま音楽室の隣にある準備室に入る。中ではすでに姫子とアカネがそれぞれの楽器のチューニングをしていた。

「エリ、急いで」

「分かってるって」

私は急いで鞄を投げ捨てギターをケースから出せばチューニングを

始めた。
今日演奏する曲は私が作詞しアカネが作曲した“ＳＴＡＲ　ＳＴＯＲＹ”という曲だ。いちごや姫子には申し訳ないが、私とアカネの物語を曲にしたものだ。ボーカルは私、サブボーカルはアカネが担当する。
通しが終われば澪が扉から顔を出す。

「エリ、時間だから出てきて」

そう言うなり澪は音楽室に戻る。アカネと姫子、私は改めて楽器のチューニングを行えば準備室を出て音楽室に戻る。そこには軽音部のメンバーとしずかだけでなく他のクラスや別の学年の人もいた。

「あれ、なんで…？」

そう思いながら軽音部メンバーの方を見るとりっちゃんが舌を出しながらガッツポーズをする。私は若干涙を浮かべながら小さなステージに立った。

「皆さん、今日は私達のプチライブに来ていただきありがとうございます。軽音部でもないのにこのような場所をいただいて本当に嬉しいです。１曲しかありませんが聞いて下さい、“ＳＴＡＲ　ＳＴＯＲＹ”！」

◇

「……最高だった」

「ええ、最高に最悪だったわ」

いだだだ、ぐりぐりしないでいちご。
いちごが怒る理由は簡単。私が緊張しすぎて出だしミスするし歌詞忘れるしでめちゃくちゃだった。

「でも楽しかったよね」

「久しぶりのライブ、やっぱり楽しいよ」

アカネも姫子も満足そうな笑みを浮かべている。するといちごはぐりぐりをやめてちょこんと三角座りをする。

「みんな、お疲れ様」

「あんまり上手く――」

「おっと、それは言わせないぞー」

澪、唯、律の後ろにムギとしずか、そしてもう一人新入生の女の子がいた。しずかと同じくらいかそれより上くらいの小さなツインテールの女の子だ。

「私らの後輩の梓だよ」

「あずにゃんって呼んであげてね？」

「唯先輩何吹き込んでるんですか！？」

私達は笑いながら立ち上がった。床に座っていたためスカートの埃を払えば、澪達と向き合う。

「今日は本当にありがとう！」

「いや、私達も演奏見せてもらえて嬉しかったよ。そうだ、これを受け取って欲しいんだ」

そう言って澪は私に数枚の紙を渡す。そこには楽譜と歌詞が書かれている。

「これ、ふわふわ時間の楽譜じゃん」

「そう、だから交換」

澪が言いたいのはつまり、私達の曲と澪達の曲を交換しようというわけだ。私も笑みを浮かべれば鞄に入っていた楽譜と歌詞を澪を渡した。

「いつか、対バンしような」

#7―また試験―（前書き）

ただの日常です。
何回も言いますが、音楽ェ…
そろそろ1期も中盤ですね…

#7―また試験―

ついに一週間を切ってしまった今日、私はシャーペンを握りながら隣に置かれた小難しい数式の書かれた参考書の内容をノートに写していた。

「エリはまず基礎から」

中間考査まで一週間を切ってしまったため、大親友佐藤アカネ様に勉強を教わろうとしたら“じゃあこの参考書に書いてある数式を５０回書いて”とか言われてしまったのだ。もちろん反抗したのだが、“体に覚えさせるしかない”と怒られて今に至る。ちなみに覚える数式は５つ。２５０回も数式書いてたら頭が一年の追試の時みたいにパンクしそうだった。

「アカネー、お願いだからもう許して…」

「これは拷問でも尋問でもありません。どこまで出来た？」

アカネは学校の数学問題集をすらすらと解き、シャーペンをくるくると回しながら首を傾げた。

「４つ目の３７回目です」

「あと少し、ファイト！」

多分後で同じ数式の問題出して出来なかったらまた５０回書かされるんだろうな。いや、もしかしたらそれ以上書かされるかも。よし、真剣にやろう。
そんなことを思いながら数式を写していき、終わると思った通り同じタイプの問題を出された。真面目に取り組んだからか、その問題はすらすらと解けた。

「これだけ出来たら赤点はないでしょ」

「アカネ先生、ありがとうございました…」

私はパンクしそうな頭でバランス感覚を保ちながらゆっくりと立ち上がり、アカネの家を後にした。

◇

「まあこれだけ勉強すれば赤点は回避出来るよね……」

私は自分の家に帰宅すればベッドに大の字に寝転ぶ。数度ごろごろと寝返れば、ベッドから下りてギターをケースから出す。

「いちごが作詞してくれた新曲、練習しとかないとな」

そう言いながらファイルを開けば“ストロベリー☆ハート”と曲名の書かれた楽譜が顔を出した。いちごはあんな態度をとるのに、実はかわいいものが好きという意外な趣味があり、曲名もかわいい名前になっている。ただ、ちょっとセンスがズレてる辺り澪と似ているのかもしれない。

澪で思い出したんだけど、あれから澪達からもらった“ふわふわ時間”も練習中で、そのうちみんなで演奏したいと考えている。

「ちょーっと私の心から香るいちごのにおい〜」

ちなみに私達のバンドのボーカルは私だったりする。サイドボーカルはベースのアカネが担当してくれていて、私にハモってきてくれる。ギターを弾きながら歌うのは最初かなり難しかったけど、姫子が付きっきりで練習してくれたため前のライブまでに弾きながら歌えるようになったのだ。

「やばい、なんかこういう時は練習がかなりはかどる…」

そう言いながら私はテスト勉強をほったらかしてずっとギターの練習をしていた。

◇

部屋の机の上に本を重ねてドラムの形を作り、スティックで本を叩いているのは私達のバンドのドラマー、若王子いちご。
もうすぐテストだというのに、いちごも勉強せずドラムの練習をしていた。

「…一人で練習してもダメなところわかんない」

コンコン、と扉を叩く音がしたのでいちごはすぐさまスティックを机の下に隠す。部屋に入ってきたのはいちごのお母さんだった。

「あら、勉強してる。ドラムの練習してるんじゃなかったの？」

練習の音が聞こえていたらしく、いちごは諦めたかのようにため息をついてスティックを出した。

「お母さんドラム分かる？」

「まあそこそこかな。私ベースだったから」

「ちょっと聞いてくれる？」

そう言うといちごは“ストロベリー☆ハート”の楽譜を母親に渡し

て、本で作った仮ドラムを叩く。

「……いちごストップ。ドラム走り過ぎだと思う」

「え…？」

「これだけ早いとギターがしんどいし、ベースもリズム合わせるの難しいと思うな」

「じゃあ…」

いちごは母親のアドバイスを踏まえて再び仮ドラムを叩く。母親はいちごの叩く仮ドラムのリズムに乗るように体を揺らす。

「……ふむふむ、そのリズムをキープすれば完璧――だと思うかな。勉強の邪魔して悪かったわね」

いちごのお母さんは自分の娘がテスト前だとようやく思い出したのか、楽譜を置いて部屋を出て行った。いちごはそれを見送れば、再び仮ドラムを叩く。

◇

「……ムギちゃんってすごい良い曲作るな」

私達のバンドの作曲を担当する佐藤アカネはプレイヤーに入った軽音部からもらった“ふわふわ時間”のリズムを聞いていた。作曲を担当したのはアカネと同じクラスで軽音部のキーボード担当の琴吹紬ことムギ。アカネはムギの作った曲を惚れ惚れと聞いていた。

「なんていうか、私も頑張らないと」

そう言うとアカネはイヤホンを耳から抜いて、ベースをケースから出す。アカネは私にあれだけ勉強をしろと言いながら、ベースの練習を始めた。

◇

「……危ない」

テストが終わり、連休が明けてテストが返却された。見事赤点より

少し上くらいの点数で、補習や追試からは免れたようだ。

「しずか達は相変わらず高得点ですな…」

しずか、澪、和の点数は私の2倍、もしくはそれ以上あり本当にすごいと思った。まあ勉強せずギターの練習をしていた私が悪いのですが、本当にすごい。

そんな私が赤点から免れた理由は、数式を半分くらいは覚えていたからである。アカネ先生のおかげなのは間違いないね。

放課後しずかと一緒に2組に行けば意外な結果が待っていた。あのアカネが57点をとっていたのだ。ちなみにいちごが54点。アカネといちごは勉強をほったらかしてバンドの練習に熱中してテストのことを思い出したのがテスト前日の深夜だということを白状した。

「アカネと私の差が8点。いちごとは5点か……私も偉くなったものだ」

「いや、エリも絶対ギターの練習に熱中してたでしょ？」

「エリが熱中しないわけがない」

アカネといちごはすごい形相を浮かべて私の方へ近付く。そんな二人の後ろで姫子が椅子から立ち上がった。

「それより私もう部活行くから」

姫子はソフトボール部に所属しており、エースをはっているらしい。

「姫子はテストどうだったの？」

「私？私はいつも通りだけど」

そう言って姫子が見せた答案には８９点と書かれていた。姫子ってこんな頭よかったの、初めて知ったんだけど。

「こんなの姫子のキャラじゃない…」

「あんたは私にどんなキャラを求めてるん、だ！」

姫子はそう言って私の頭をチョップした。あんまり痛くはないけど、姫子のツッコミは初めて見れたので貴重な体験をした気分だった。

#8―水泳―（前書き）

夏といえば海、プール！
ってなわけでそんな回。

だから音楽関係ねェ

#8―水泳―

ついに今年も夏休みがやってきた。宿題をほったらかして私達は市民プールに来ていた。

「ここ、あんまり人来ないから安心して泳げるよね」

アカネを先頭に姫子、しずか、いちご、私の5人でプールに来ていた。私達は入場券を購入すればすぐに更衣室に向かった。

※ここからは音声だけでお楽しみ下さい。

「あれ、いちごって意外に胸小さいじゃん。着痩せするタイプだと思ってた」

「死ね、アホエリ」

「アカネと姫子って見た目通り胸大きいよね、あと身長も」

「私は姫子には敵わないよ…」

「いや、アカネの方が形良いじゃん。しずかはこれから身長も胸も大きくなるから安心しなって」

「ねえしずか、胸って揉んだら大きくなるらしいから揉んであげよ

っか？」

「え、ちょエ…リぃ。あ、ん…だめぇ」

「死ね、アホエリ」

「ついでにいちごの胸も揉んじゃぬぐわっ！」

「ご愁傷様」

「もう、エリったら…」

「た、助かった…」

本当にごめんなさい。
いや、定番かと思って。

◇

「胸などなくても私の勝負水着は輝いている！」

日焼け止めを塗り終えた私はプールサイドで踏ん反り返る。プールといえばまずはシャワー。このシャワーで女の子がかわいい声を出したりするのが定番なのですが、今回は飛ばします。とりあえずある程度体操を終えれば私はプールを目の前にして空を指差す。

「今日は最高のプール日和だずわぁ！」

「公共の場で恥ずかしいことするな、アホエリ」

いちごは私の背中を蹴り飛ばし、私はそのままプールに落下した。アカネはそれを追い掛けるように飛び込む。

「アカネって昔から飛び込みだけは上手いよね。泳ぎはだめなのに」

水面から顔を出せば必死にクロールを泳ぐアカネの姿が見えたが、さっきからあんまり前に進んでいなかったりする。

「ふーん、アカネにも苦手なことってあんたんだ」

そう言いながら色気ムンムンのビキニ姫子がプールに入ってきた。そう言って姫子はアカネの元へ泳いで向かった。

「姫子って本当運動神経抜群だよね…」

次に水面ギリギリのところに顔のあるしずかが入ってきた。身長が低いのであんまり深いプールには入れなさそうだ。

「あれ、いちごは？」

「疲れるから待ってるって」

「いちごって本当にバトン部なの…？」

いちごは桜高のバトン部に所属しており、一応期待の星と呼ばれているらしい。バトン部って結構体力使うと思うけど、やっぱりいちごの感性は理解出来ん。

「じゃあしずか、私達も遊ぼっか？」

そう言って私はプールからあがり、あらかじめ持ってきていたビーチボールを出す。

「バレー部の意地、見したるで！」

そう言って私はいちごに蹴られる前にプールに飛び込む。飛び込み禁止って看板が立っていたが、気にしない。係の人とは顔馴染みで、私に飛び込み禁止の注意をしても飛び込むことが分かっているため注意もしてこない。

「はい！」

「そいや！」

「ほっ！」

「まだまだ！」

途中から姫子とアカネも参加し、午前があっという間に過ぎた。

◇

「お腹空いたんだけど、ここでゲームをしたいと思います」

「却下」

午前中は全く泳ぐことのなかったいちごが即答。

「何故！？」

「どうせ２５ｍ水泳のレースで負けた奴は買った奴の昼ご飯奢りとかいうんでしょ？」

「そこまで当てられるいちごが怖いよ…」

そう言いながら私は売店のうどんを購入し、机の上に置く。アカネとしずかも私と同じくうどん。姫子はラーメンいちごはカレーライ

スを購入。

「それじゃいただきまーす」

私は早速割り箸を割り、うどんの麺をすする。

「うん、やっぱりきつねうどんは美味しいよね！」

「でもこれ足りないでしょ？」

そう言っていちごは私に瓶詰の七味唐辛子を渡す。

「あ、ありがとう…」

いちごが妙に優しいのを気味悪く感じながら、私は蓋を開けて七味唐辛子をうどんに軽くかける。

ドバッ

「……ドバッ？」

蓋が根っこごと取れて中に入っていた七味唐辛子が全部私のきつねうどんのおあげの上にこんもりと盛られた。

「あ、ごめん。それ壊れてたー（棒読み）」

いちごは明らか仕組んだけど私知りませんみたいな表情でそう呟い

た。周りにいたアカネやしずか、姫子達は腹を抱えながら笑っているため私はどんな反応をすれば良いかわからなかった。結果作った人に申し訳ないといちごに論され、激辛うどんを完食させられることになった。

「胃が、胃が荒れる…」

「さ、そろそろ私も泳ご」

パラソルの下で休んでいた私の隣でいちごが着ていたTシャツを脱ぎ捨てた。ドレスみたいにフリフリのついたかわいい水着。かわい過ぎてなんかいちごに似合ってない。それが私の率直な感想である。多分これを本人に言ったら顔を蹴られるので、言わないでおこう。私も泳ごうと立ち上がるが、先程の激辛うどんのせいでへなへなと座り込んでしまう。

「いちご、まさか仕組んだな…」

プールに入ろうとするいちごはこちらを向くなり悪笑を浮かべた。うわ、この人絶対わざとだ。午後から私は一度もプールに浸かることなく、時間が過ぎていった。

◇

「ふう、楽しかった」

「胃が…」

帰路の途中いちごが満足そうに一息つく横で私は未だうどんのダメージに苦しんでいた。

「エリ、胃薬」

「今更ですか！」

アカネは鞄から胃薬を出せば私はすぐさま受け取り買っておいたお茶で3錠ほど流し込む。

「でも本当に楽しかったよね、姫子？」

「……」

「…姫子？」

しずかの問いに答えず暗い表情を浮かべる姫子の顔を私は覗き込む。

「…ふぅ、みんなに話がある」

姫子はため息をつけば、こう言った。聞き間違えたのではないかと思うくらい唐突な一言を。

「私、バンド辞めるよ」

#9―新加入―（前書き）

話がやたらggdggdです。
とりあえずここで軽いキャラ紹介でも。

瀧　エリ／リードギター
佐藤　アカネ／ベース
若王子　いちご／ドラム
木下　しずか／リズムギター
立花　姫子／元メンバー
秋山　澪／エリの友達
真鍋　和／エリの友達

活動報告に色々書くことにしました。

#9―新加入―

「私、バンド辞めるよ」

プールの帰り、姫子の言った言葉が正直理解出来なかった。数秒してから、ようやく私は姫子の言った言葉を理解した。

「や、辞めるってなんで…？」

「私さ、母子家庭なんだ」

姫子は俯きながらそう言った。

「それで、昨日お母さんが倒れて入院した。私少しでも入院費稼ぎたいから、バイトしようと思うの。だからごめん、バンド活動はこれ以上無理…」

姫子はそう言い終えると深く頭を下げた。ようやく活動出来ると思ったらまたメンバーが足りなくなりあと戻り。頭では納得出来ていたが、気持ちは納得出来なかった。

◇

「エリ、仕方ないよ。姫子も姫子の事情があるんだから」

次の日、私は河原でアカネと練習をしていた。ギターの重さがいつもより重く感じられる。

「だって、今いるメンバーでまたライブしたかったからさ…」

これからのライブで味わう楽しさを初ライブをした時のメンバーで味わいたかった。これが私の本音。アカネもいちごも姫子が抜けることには承諾している。そもそもこのバンドにはリーダーがいないため、承諾もくそもない。そもそも姫子が抜けるのは仕方のないことだ。

「それでも、私は姫子ともっとツインギターやりたかったよ…」

姫子がリードギター、私がリズムギター。姫子とのギターの絡みが好きだった私は、とてもやるせない想いに戸惑っていた。

「メンバーをまた探せば大丈夫だよ、ね？」

「足りないメンバーは探せばなんとかなるけど、姫子のギターは姫子しか弾けないんだよ…」

だめだ。これ以上私が何か言ったらまたアカネを傷つけてしまう。私は「今日はもう帰る」とアカネに言い残し、ギターをケースに直してとぼとぼと歩き去る。

◇

泣いたアカネがいつも座っている星ヶ丘広場のベンチに来れば、そこには先客がいた。黒く長い髪にお姫様カット。軽音部の澪だった。

「エリ、表情暗いけど何かあった？」

私は澪に昨日のことを話した。

「……エリは気持ちも分からなくでもない。私も今のメンバーの誰か一人が欠けるなんて絶対に嫌だ」

澪は凜とした表情で続ける。

「バンドやってたらたまにあることらしいよ、メンバーの脱退。姫子は良い音出すし、エリのギターとの絡みは確かによかったからな…。でもそれを割り切るのも、メンバーの仕事だと私は思う」

「割り切る、か」

つまり諦めるということ。姫子とバンドを続けるのを諦める。言うなら簡単だ。でもやっぱり私の気持ちは納得しなかった。

◇

私は帰宅途中、近くのコンビニに寄った。頭を冷やすために何か飲み物を買おうと思い、適当にコーラを冷蔵庫から出せばレジに持っていく。

「あれ、エリ…」

「え…？」

顔を上げればレジで会計をしていたのは姫子だった。コンビニの制服を着て会計をしている。姫子は本当にバイトを始めたんだなと、改めて感じた。

「１４８円になります」

私は財布から１００円玉を二枚出す。お釣りに５０円玉一枚と１円玉二枚、コーラを受け取れば無言で外に出た。

「……新しいメンバー、か」

またいつか、姫子とバンドが組めると信じて私は空を見上げた。星が一瞬流れて消えるのが見えた。

「流れ星、初めて見た……」

生まれて一番目に見た流れ星がこんな場所だと、何故か皮肉な気持ちになってしまう。

「そういえば私達、バンド名決めてなかったな…」

夏休み明けの文化祭で軽音部が演奏したあと、また軽音部の部室を借りてライブをすることが先週くらいに決まった。ライブしたのにバンド名決まってないし、メンバーも足りない。

「なんか、グダグダだよね…」

◇

あれから数日後、姫子が脱退してから初めてバンドメンバーが集まった。集合した場所はいつも練習している河原だった。私とアカネが到着するとすぐにいちごも到着した。続けてしずかも来た。

「あれ、なんでしずか？」

私が呼んだのはアカネといちごだけだった。

「私、姫子に知らせといたんだけど…」

アカネがゆっくりと挙手する。しずかをよく見れば背中にギターケースを背負っていた。しかも見たことのあるギターケースだった。

「姫子がバンド辞めた次の日に姫子から電話があったんだよ」

「電話…？」

「私の意志を継いでエリ達のバンドに入ってくれって。その時一緒にギターもらったの…」

つまりしずかの背負っているギターは姫子のものというわけだ。

「私ギター全く分からなくて、姫子も忙しいからどうしようって思ってたんだけど軽音部メンバーが徹底的に基礎を教えてあげるとか言ってきて。連絡遅れてごめんなさい！」

軽音部がしずかに基礎を…。
心当たりがあった、澪だ。多分澪が姫子に連絡して、姫子が澪にしずかを鍛えるよう頼んだんだろう。

「まーた天使をくれたんだ……」

軽音部は私にアカネと肩を並べる音楽をくれた。そして次はこんなたくましいメンバーをくれた。

「じゃあ改めてよろしく、しずか！」

私は笑顔を見せながらしずかに手を差し延べた。しずかは涙を浮かべながら私の手をとる。

「そんなみんなにちょっと話があるんだ。バンドの名前考えてみたんだ」

「くだらない名前だったら河に落とすから」

「一番星って、どうかな？」

「一番星？」

このバンドは多分姫子がいなかったら存在しなかったと思う。だから姫子の夢を叶えるために込めた名前、一番輝く時願いを叶える星。

「だから一番星」

「エリにしては良い名前考えるじゃない」

「私もその名前、良いと思うよ？」

「うん、すごく良い！」

「よっし！」

私は両手をギュッと握ればアカネ、いちご、しずかを一気に抱きしめる。

「今日から一番星、活動再開して行くぞ！」

「「「おー！」」」

私達一番星の絆を作りあげてくれた姫子の分も、私はギターを弾く。
姫子のためでもあるけど、それ以上に私のために弾く。
音楽というものを本気で好きになったと感じたのは2年の夏の夕方だった。

#10―後輩―（前書き）

さて、ライブ間近になります。
今回話が短い。

それと重大発表を活動報告でさせていただきます。

#10―後輩―

私達一番星の持ち曲は少ない。まだ結成したばかりのバンドだけど、歌っている曲は全てオリジナル曲。だからライブで歌える曲がかなり少ないのだ。初めて作ったＳＴＡＲ　ＳＴＯＲＹと、最近いちごが作詞したストロベリー☆ハートの二つだ。そのため作曲を担当している私の親友佐藤アカネが新曲を作ってきたのだが、作詞は私瀧エリが担当することになってしまったのだ。

「どうしよ…」

何故私になったのかというといちごは「ＹＡ☆ＤＡ」と言い、しずかも「無理だよ、私才能ないし」と言い、アカネは「私作曲したし」と言い結局私に回ってきたのだ。

「あれ、エリじゃないのか…？」

バレー部の練習が終わり、歌詞のネタがないか校内をぶらぶらしていると同じクラスであり軽音部に所属している秋山澪と遭遇した。

「澪…。歌詞考えるのって難しいね」

◇

そのことを話せば澪は私を軽音部の部室へ連れていってくれた。ついでなのでアカネ達も呼んで軽音部の部室へ向かう。澪も作詞をしているらしく、一緒に考えようということらしい。

「新曲かぁ…」

「次の文化祭後のプチライブで歌おうと思ってて…」

そう言いながら澪は私の音楽プレイヤーに入ったアカネ作曲の歌を聞く。

「良い感じの音だな…。あとはここに詩つけるだけなんだろ？」

「それが簡単じゃないんだよ…」

「唯先輩やめて下さい！」

隣で少々大きめの声が部室に響く。振り向けばそこには唯に抱き着かれている唯達軽音部の後輩、中野梓がいた。黒く澪くらいの長い

髪をツインテールにして、しずかより少し身長が高いくらいのかわいい後輩だ。新歓後のライブから顔見知りにはなったものの、きちんと話したことはない。

「唯、あんまり梓をいじめるなよ？」

「えー、いじめてないよ。ねー、あずにゃーん？」

「さあ、どうでしょう」

澪の注意を全く聞こうとしない唯に梓ちゃんはそっけない態度をとる。それよりも唯の梓ちゃんに対してのあだ名の方が問題だ。

あずにゃんって。

かわいいあだ名だけど、まだちゃんと話してない私じゃ呼べないあだ名だった。だってあずにゃんなんて気軽に呼べるあだ名じゃないし。

「しずか先輩も見てないで助けて下さい！」

「え、だって見てたら面白いし…」

「面白がらないで下さい！」

梓ちゃんに気軽に話しかけるしずかに違和感を感じた私は、しずかの隣に立つ。

「しずかって梓ちゃんの知り合い？」

「梓ちゃんってギターすごく上手いから、私の特訓見てくれたんだ」

「え、梓ちゃんってギター上手いの？唯より？」

「うぐ…」

唯は図星を突かれたようにうろたえる。梓は戸惑う。

「そんなことは、ないですけど…」

「お願い梓ちゃん、ギター教えて！」

「ちょエリ、歌詞は！？」

◇

「そこでチョーキングいれたら、良いですよ」

「チョ……ミョ～ン」

チョーキングは先日アカネから教わったもので、アカネから教わっ

てなかったら多分ここで止まっていたと思う。

「で、そこはビブラートを…」

「ビ、ビブラート？」

そろそろ挫折しそうです。

「あ、あずにゃんもっとわかりやすく…」

「エリ先輩までその呼び方…」

あずにゃんはため息をつきながらソファに腰を降ろす。私はギターを壁に立てかければ歌詞を書くべく席につく。

「うーん、そうだなー」

私はあずにゃんを見ながら適当にペンを走らせる。そのあずにゃんはため息をつきながらも唯にギターを教えている。

「私達も何か新曲書いた方が良いかな？」

「んー今はいいだろ？」

「それよりお茶にしましょう？」

そんなこんなで遊んでいると時間が過ぎ、気がつけば下校時間になっていた。

◇

「ナーンバーワン、ナーンバーワン」

私はギターの練習ついでに歌詞の続きを考えていた。かなり形になっているが、サビからがなかなか思いつかなかった。

「せめて何かお題があれば…。澪みたいにホッチキスとかカレーとか」

一度ペンを置けば私はベッドの上にダイブする。

「……後輩、か」

バレー部にも後輩はいるが私より他のメンバーに懐いているので、私も私に懐いてくれる後輩が欲しかったりする。

「あずにゃん…」

私は今日仲良くなったばかりの後輩、あずにゃんのことを考えながら瞳を閉じた。

◇

「えっと、文化祭の練習あるのに何度も押しかけてゴメンね？」

軽音部の部室に入ればアカネは頭をペコペコと下げる。私の書いた歌詞が少し著作権に反するのではないかと疑われ、軽音部のメンバーに聞いてもらうことになったのだ。だが今日は何故かりっちゃんがいない。休みのようだ。

「律いないし、大丈夫だよ」

「で、聞いてほしい曲って何ー？」

少し暗い表情をする澪に不安を感じながらも私はドラムのいちごを見る。

「大丈夫」

「私も」

「大丈夫だよ」

左右にいるアカネとしずかも確認するば私はマイクの前に立つ。

「著作権に反するか聞いて下さい、あずにゃんＮＯ．１！」

「へ？」

曲名、あずにゃんＮＯ．１。
作詞、瀧エリ。

「こんなんじゃだめですーー！！」

あずにゃん以外には好評だったため、この曲は採用となった。
ただ、あずにゃんは最後まで抗議し続けたかのだった。

#11—文化祭—（前書き）

本編最終回どす

#11―文化祭―

今日は文化祭。
私達2年1組のクラスの出し物はお化け屋敷で、私としずかと澪、そして和は初日が当番。澪はお化けが怖いので受付がほぼ確定しており、私達は交代でお化け役をやることになっている。

「澪っ！」

「あれ、アカネ。どうしたんだ？」

受付の澪の前に現れたのは青いエプロンにハチマキ姿の佐藤アカネだった。エプロンには“2年2組お好み焼き”と書かれている。

「昨日の夜、和から話があるってメールがきたから来たんだけど…」

「あら、丁度よかった」

そう言って出口からぬりかべお化けの着ぐるみを着た和が出てきた。見たところそんなに怖くないからか、澪も怖がっている様子はない。

「貴女達のバンドのリーダーってアカネよね？」

「いや、リーダーいないんだけど…。まあ一番取り締まってるのは

確かに私かも」

「それでも良いわ。昨日軽音部のライブの前にやる勇姿演技が体調を崩したせいでキャンセルになったのよ。それで空きがあるから貴女達のバンドのライブをやらないって言おうと思って」

アカネは驚愕の表情でバインダーを見つめる和を見た。

「それ、本当なの…？」

「ええ。軽音部の前なら機材も共有出来るから時間短縮出来るし」

「アカネ、それすごいんじゃないのか？文化祭ライブ、アカネ達も出来るんだぞ！？」

「あの、えっと……。引き受けます、私達でよかったら…」

和は適当に相槌をうてば、バインダーに挟んであった講堂使用申請用紙をアカネに渡す。アカネは澪からペンを借りればすぐさま用紙に必要事項を記入して和に用紙を渡す。

「じゃあ明日の１２時半からだから、遅れないでね？」

「うん…」

和はそう言うと生徒会室に向かってその場を去る。アカネは一息つけば澪の方を向く。

「そういえば唯は？」

「まだだって」

つい数日前から唯は風邪をひいており、明日ライブを控えているのにまだ治っていないらしい。

「早く戻って来ないと…」

◇

「私達が文化祭ライブを！？」

休み時間、私達は４人で集まって屋台を回っていると朝のことをアカネが話し出す。その内容に私を含めたみんなが驚く。

「軽音部の部室じゃなくて講堂でライブってこと？」

「やったじゃん！こんなに早く大きなライブが出来るなんて…」

いちごもしずかも、もちろん私もテンパる。持っていた焼きそばを落としそうになったため、深呼吸をすれば私はアカネに寄る。

「じゃアカネ、歌う曲をどうするか決めないと。あずにゃんNO.1とストロベリー☆ハートは確定でしょ？」

「あの曲、投入しよ」

いちごが不意に呟く。
あの曲とは私達がとある人物のために作った曲で、作曲はアカネが担当し作詞はしずかが担当した曲。

「でもあの人来てくれるかな…？」

「きっと来てくれるよ！だってあの人だし」

しずかは確信しているようにそう言った。

「…そっか。じゃあ今日軽音部の部室借りて最終確認だけやって帰ろっか？」

「ダメ。軽音部も最後の練習あるから私達は今日だけでもスタジオ借りて練習しよう」

◇

文化祭初日が終われば、私達はすぐに楽器を持って学校近くのスタジオに向かった。そこで最終確認を終え次の日。本番を迎えた。

「おはよう…」

軽音部の部室に機材を運ぶのを手伝いに来れば、部室は暗い雰囲気を漂わせていた。一目で分かった、唯がいない。

「来てないんだ…」

「うん…」

アカネが澪にそう尋ねると澪は頷く。

「ともかく機材運ぶの手伝うよ」

「助かる」

私達はアンプやドラムセットを講堂の袖まで運んで行く。講堂にはかなりの客が来ており、恐らく軽音部の演奏が目的なのだろう。私がアンプを運び終えて部室に戻ろうとすれば澪達が入ってくる。

「もう機材全部だよ。それと唯が来た」

「本当！？」

「ああ。でも……ギター忘れたって」

多分今の私は目が点になってるのだと思う。なんというか、唯らしいっちゃ唯らしいのだが。

「エリ、そろそろ準備して」

「あ、うん」

和に言われて私は舞台の方へ機材を運んで行く。そしてついに私達の舞台が整ったのだった。

「エリ、準備は？」

「大丈夫、緊張はしてるけど。しずかは？」

「めちゃくちゃ緊張してる、でもいけそう。いちごは？」

「帰りたい、でもいける。アカネは」

「もちろん大丈夫」

それぞれ確認を取れば深呼吸をする。今前にある幕の向こうにお客さんが大勢いると考えただけで吹っ飛びそうだ。

「それではお待たせしました、ニューガールズバンド“一番星”による演奏です」

上の方から和の声がした。その声と同時に幕が上がる。そうすると今まで見えなかったお客さん達が姿を現す。その姿に私は足を震わせる。

「エリ…」

「……皆さん初めまして、一番星です！」

私はマイクに向かってそう叫ぶ。

「今日は私達のライブに来て下さりありがとうございます。それでは早速一曲目からいきます」

マイクに向かって叫んでいると、いつの間にか緊張がなくなっていた。緊張し過ぎたのかもしれない。数ヶ月前にやった軽音部の部室でやったプチライブとは全く別物の緊張だった。

「あずにゃんＮＯ．１！」

袖であずにゃんが顔を真っ赤にしているのを気にせずいちごのドラムが唸る。そして私達の演奏が始まった。

「私の後輩、大好きな後輩。かわいい後輩、やんちゃな後輩。でも、本当は私の後輩じゃないのよ！ＮＯ．１、ＮＯ．１。世界で一番すごい！ＮＯ．１、ＮＯ．１。無敵で最強後輩、あずにゃんだ！」

いつものようにギターが弾けているのか、ちゃんと歌詞を間違えないと歌えているのかなんて分からない。でも私は全力でギターを弾く。

「あずにゃんＮＯ．１でした、改めまして一番星です。私達は実は学校でのライブが二回目だったりします。初めては新歓の少し後くらいにこっそりやってました。その時から練習し始めた曲ってのがこの曲、ストロベリー☆ハート！」

◇

「ストロベリー☆ハートでした。次の曲の説明をさせていただきます。私達は実はこの４人で活動していたわけではないんです。しずかは数ヶ月前に入った新規メンバーなんです。で前までギターやってた人は事情があって辞めちゃったんだけど、その人に私達は沢山のことを教わりました。とっても感謝しています。だから貴女に送るこの曲です」

講堂の一番後ろで壁に背中を預けている女子生徒、立花姫子に私は全力で叫ぶ。

「アフタースクール！」

あれから　どれくらいの日々が流れた
きっと　数え切れない月日が流れた

貴女に教わった　ギター、ベース、ドラム
それぞれの　想いを

楽器に乗せて

放課後のチャイムを聞けば　貴女の側に行けば
前に進めると　思っていたのに

今はもう　過去の出来事
ゴメン　だから　ありがとう

◇

演奏が終わり、退場すれば私達は講堂の端っこで座り込んでいた。

「なんか飛んだ」

「私も」

アカネは自分のベースをケースごと抱きしめそう言う。

「上手く、出来たかな？」

「私が見る限りでは出来てたわよ」

そう言っていちごはしずかの頭を撫でる。

「あんた達、本当に馬鹿だよ」

言葉の主は立花姫子だった。
「どうだった、私達のライブ？」

「最低だよ。なんで聞いてる方が泣かなきゃいけないの」
よく見れば姫子の目が若干赤くなっており、袖口も涙を拭いたからか湿っている。

「でも、私達馬鹿だからこんな方法でしかお礼出来ないんだよ」
「あんたと一緒にしないで」

いちごの毒舌も変わらない。

「ほら、放課後ティータイムの演奏始まるよ？」

しずかの身長も変わらない。

「あ、澪……良い声」

アカネが親友なのも変わらない。

「あれ、あの子…」

そして私も変わらない。

「唯ーー！」

「あ、エリちゃん？ブイ！」

「いいから行ってきなって」

私達は世間一般ではモブという扱いを受けている。この話は軽音部にスポットライトを当てた話だ。だから私達はモブでしかないのだ。でも私達モブにだって物語があり青春はある。たまたま軽音部にスポットライトが当たっただけで私達にだって物語はある。そして今だからこそ言える。私達はモブだけど、今だけは主人公なんだってことを。

「軽音大好きーー！」

「私も大大好きーー！」

一人の馬鹿の叫びに馬鹿が叫び返した瞬間だった。

おしまい

#11―文化祭―（後書き）

こんな駄文を最後まで読んでいただき感謝です。
次は二期……と思いきや、けいおん！恒例の番外編をお送りします。

二期は番外編が終わってからですね。
ではまた会いましょう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6070z/

もぶおん！

2011年12月31日00時52分発行